ベイソレイセンと「歴史の終わり」と東南アジア

鈴木絢女

2024年度に着任した鈴木絢女（すずきあやめ）と申します。東南アジアの政治や国際関係を研究しています。

2010年代半ば頃から、アメリカと中国の競争のなかで東南アジアが重視されるようになり、日本のメディアでも、この地域の政治経済ニュースを頻繁に目にするようになりました。しかし、私がまだ「若手」と呼ばれていた2000年代には、「鈴木さんは、なぜ東南アジア研究者を志したのですか？」とか、「なぜインドネシアを研究しているのですか？」と聞かれることもしょっちゅうでした。まっすぐな若者だった私は、質問の意図を尋ねることはしませんでしたが、今思うと、「なぜそんなマイナーな地域を見ているのですか？」という趣旨の質問だったのかもしれません。

まず「私の研究対象はインドネシアではなくて、マレーシアです」と訂正すると、「はあ…」。「マハティールの国ですよ」というと、「ああ、そっちね」。日本の産業政策や労働倫理に学ぼうとする「ルック・イースト政策」の主唱者であるマハティール元首相の知名度に、何度も助けられました。当時、このヒントなしに「マレーシア」でピンとくる人は、研究者か国際関係畑の方か、駐在経験のある方か、熱帯生物オタク

くらいでした。

同じ質問はマレーシアでも頻繁に受けたので、答えを準備することにしました。しかし、人生における選択の理由を特定するのは、それほど簡単ではありません。変数をコントロールできる実験室とは違い、人生は、出来事や事件、人間関係、アイデア、時には本人の意識には上らない事柄も含め、さまざまな変数の結果として編まれていくからです。しかも、人間の脳は、盲点を補ったり、記憶を書き換えたりということを平気でします。

そういうわけで、「なぜマレーシアか」「なぜ東南アジアか」という質問への客観的に正しい答えは私にもわからないのですが、現時点でのナラティヴとして、こんなふうに答えています。

1．米ソ冷戦の前に潰えた少女の夢

生まれてはじめて言語化した将来の夢は、中国雑技団に入ることでした。6歳頃のことでした。自分は北京の舞台で、高く積み上げた椅子の上でスポットライトを浴びてポーズを決めるのだと本気で思っていました。母親にパスポートの取得を依頼しましたが、当然却下され、私はひどく荒れました。鈴木家は家父長制の世帯だったので、母親が処理できない案件は、父親に上がります。父親は私を和室に呼びつけ、自分が米ソ冷戦に関わる仕事をしており、娘を北京に行かせることはできないと言いました。「アメリカ」と「ソレン」という大国が対立していて、世界が分断されていて、日本と中国はこっち側とあっち側に分かれているということ、そして、私は雑技団の団員にはなれないということだけはわかりました。私の人生の初めての夢が潰えた瞬間でした。「アメリカ」も「ソレン」も大嫌いだと思いました。

2．アジアの価値

しばらくすると、音楽という絶好の気晴らしを見つけ、ベイソレイセンのことも、大国への反感もすっかり忘れました。学生生活を謳歌している間に、冷戦が終わりました。自由民主主義が勝ち、歴史の弁証法は終わったと著名な歴史家は言いました。しかし、ユーゴスラビアやルワンダなど、民主化したいくつかの多民族国家で、投票をめぐる競争が暴力へと発展し、内戦が起きたのです。

自由民主主義への幻滅のなかで、マハティールや李光耀など東南アジアのリーダーたちが、自分たちは自由民主主義や普遍的人権は実践していないが、社会の調和や安定、豊かさを実現したと主張しはじめました。「アジアの価値」です。もちろん、この主張の裏側には、反対派の厳しい弾圧という現実が隠されていたのですが、私にはひどく魅力的な響きを持っていました。建国から数十年の歴史しか持たない多民族国家で、大規模な殺し合いをせずに、経済成長も実現した東南アジアの国々のリーダーの言葉には、たしかに説得力がありました。また、19世紀以降、ヨーロッパへのキャッチアップのために富国強兵の道をひたすら歩み、大きな過ちを犯した後に、平和国家、自由民主主義国家に生まれ変わるという独特な近代化を遂げた国に生まれた人間として、アジア発の国家建設モデルに惹かれるところもあったように思います。

3．東南アジアという沼

大学時代の夏休みとバイト代は、東南アジア旅行に費やしました。ベトナムでは、ハンセン病患者が隔離された村を訪れました。指のないお爺さんが、瓢箪で作った水筒に井戸水を入れたものを下さり、ありがた

くいただきました。井戸水を飲んだ経験は、後にも先にもその時くらい。のちに発見されたピロリ菌は、この時のものだったのかもしれません。除菌の薬を飲みながら、お爺さんの優しいお顔を思い出しました。独立前の東ティモールでは、内戦で家族を失った女性に、美しい手織りの布をいただきました。アジア通貨危機（1997-98年）の翌年には、スハルト大統領の独裁が終わって間もないインドネシアを訪れ、私と同世代の若者が野党の赤い旗を持って歓喜する様子を、羨ましく眺めました。

通貨危機で「アジアの価値」の議論はすっかり下火になりましたが、私の東南アジアへの情熱は変わりませんでした。今思えば、修士１年の冬、気管支炎のために外資系コンサル会社でのインターンを辞退し、欠席するはずだった国際関係論のゼミに出たのが、運の尽きでした。課題図書は、カール・ドイッチュの *Analysis of International Relations*。個人レベルの分析から国際関係のダイナミクスを解く手法を学びながら、「国民」というまとまりすらないままに独立した東南アジア諸国が、どうやって「国」になり、さらに東南アジア諸国連合（ASEAN）というまとまりを作り、それなりに暴力を避けながら地域の成長と安定を実現したのか。そんな問いが頭から離れなくなりました。

アジア通貨危機のなかでもアメリカ主導の国際秩序に異議を唱え続けたマレーシアが、私の行き先のように思えました。マレー語もままならないままにマラヤ大に留学し、法学部図書館で国会議事録を読み続けました。タクシーの運転手と喧嘩したり、マラヤ大のオーケストラでティンパニーを叩いたり、政治家やビジネスマンに散々奢ってもらったり、ペトロナスツインタワーの87階でマハティール元首相と２時間お話しさせていただいたりしているうちに、博士論文が仕上がりました。

4．好奇心と恩返しと解放と

昨年、「グローバルサウス」についてお話しする機会が何度かありました。このカテゴリーに入れられた国それぞれに国家建設の歴史があり、成功体験と失敗体験があり、それにもとづく外交ドグマがある。大国主導の国際関係を常態とし、それ以外の国をそれっぽいカテゴリーの中に放り込んで分かった気になるよりは、国際関係論で「客体」とされてしまう小さい国も含めて、それぞれの国に語ってもらおう、その中に、新しい国際秩序の萌芽があるかもしれない、という趣旨のことを申し上げました。

セミナー後の懇親会で参加者の一人から、「鈴木さんの中小国への思いは、どこからくるのですか？」と聞かれ、父親がベイソレイセンについて語ったあの日のことを急に思い出しました。私が東南アジア研究を続ける根っこには、雑技団の夢を潰した大国主導の世界への違和感があり、その上に国家建設とか国際秩序といったアカデミックな問いが乗っていて、その外堀をマレーシアの友人たちやタクシー運転手、ペトロナスツインタワー、気管支炎とカール・ドイッチュ、ピロリがびっしり固めている、そんなイメージが浮かんできました。

私の東南アジア研究は、アカデミックな好奇心と、善意に対する報恩への思いと、あの日、和室で夢破れた少女を解放したいという情念にぐいぐい引っ張られているということに、気がつきました。これだけの理由があったら、しばらくは辞めることが出来なさそうです。